

「急だけど、明日、山に行かない?」「行先は、福井県の岩籠山(いわごもりやま)、朝6時半、出発」山に登る話が急遽決まり、“久子車”で出発。この山は10日ほど前に登った赤坂山の少し先、10キロぐらい北に在る山、名前も聞いた事は無かったが登ってみると人気があるらしい山、1000メートル足らずの低い山だけれど頂上直下のなだらかな丸い背中の処、草が生える中に大きな岩がゴロゴロ、あっちに二つ、こっちに三つ、岩が山に突き刺さったというのか、岩が山からよきり芽を出したというのか、緑色をした地面、風でなぎ倒され雪で踏み固められた処、雪が融け生い茂る草、白い雪と白い石では絵にもならないが、緑の中の白い石、緑の中に白い石が強烈に笑いかけてくる、これには参った。車は国道161号線<西近江路というらしい>をどんどん走り茨木を出て2時間ぐらいで“駄口登山口”に着いた、登山者用の駐車場が整備されている。“マキノ高原”は左と書いた標識を過ぎると滋賀県と福井県の国境、国道161号線は2車線の狭い道、冬季は雪が積もるので道路の左右から除雪用の水しぶきが舞い散る、その中を大型トラックが猛スピードで走る、狭い国道、坂道、昔の人が造った山間部の曲がりくねった道、あまりスピードが出ていなくてもそのエンジンの轟音を聞けば、怖いと感じる。国境の峠が琵琶湖と日本海の分水嶺、そんな道だが、まだ温かい今の季節、それでも山から別の場所に下り、この国道を歩いて登り口まで帰るとなると勇気がいる、この道は歩けない、大型トラックに接触すればあの世行き、今日も動物の死骸を三体も見た、なんと一匹は鹿だった。登山口に「てっぺんまで2時間半」と書かれている「よおし」と登り始めた。ここは琵琶湖と日本海が両方見られる、冬は猛吹雪が荒れ狂うのか、たった1000メートル足らずの尾根道には木が無い、尾根を右へ左へ下がると、照葉樹林、お気に入りの“ブナ”が盛んだ“ミズナラ”もたくさんある「これがアカガシ」「りんどう」「せんぶりの花」知らない草木の固有名詞が飛び交う、今日は“トリカブト”は無かったが“リンドウ”と合わせて紫色の花が気に入った。

オレも二・三人の知人から“御嶽山”関係のメールが来た、久子さんにも何通も来たらしい、「登っていなかったか?」「火山の山には行くな!」というたぐいの話だ。噴火の9月27日(土)はアトリエに居た「御岳山が噴火した」とラジオが聴こえた「へえ～、噴火か」「多分噴火の予知情報出ていたはずなのになんでそんな時に登っている人が居るのか」と聞き流し「あの山は信仰目的で登る人が多い、GWに歩いた大嶺奥駈道と同じで、夏には白装束の人たちで溢れかえる」簡単な噴火だろうと高を括(くく)っていたが、後々の報道を聞くと“現代の技術では噴火予知はできなかった、噴火予報は無かった”“御嶽山信仰の登山季節は終わっていた、普通の登山者だけだった”とわかった。美しい紅葉の季節、3000メートル級ながら日帰りですぐに登れる山、お昼に頂上で弁当を食べようと多くの人々が集まる時間、そんな時に突然の噴火、巨大な煙が動画に写っている。亡くなった方々には心から哀悼の意を表したい。最近の報道は灰に埋もれて長い時間ピクリともしない人でも“心肺停止状態”というらしい、そういう人たちを一旦麓の建物の中に降ろし、検死をしてから“死亡確認”と報道する。噴火直前の写真を見ると、絵に描いたような紅葉の風景、その風景を見ようと休日にたくさんの方が登った、丁度昼時「てっぺんで昼飯」と計画して登った人が多いはず、噴火の予知は難しいようで、登山者にはそんな情報は一切なかった、みんなまさか噴火が目の前で起こるとは思ってもいなかった、モクモクと巨大な煙が上がり“熱風”と“石の飛礫(つぶて)”膝を超える“熱い灰”が積もるとは想像もしてなかっただろう。登山は危険な遊びだ、普段は簡単に登りに出かけ「おもしろかった」と嬉しがっているが、危険はいっぱい潜んでいる。

御嶽山に最近登ったのは何時だったかと調べた、2年前の11月3日に登っている。その時は上西・衣川・オレの3人で行った、キヌさんが「御岳山でも修行がしたい、10ヵ所ぐらいの場所をお参りしながら登りたい」「それなら下で待っている間にスケッチがしたい」と言ったのはオレではなくウエさん、というようなことで車で麓の高原へ。車を止め「さあ!」と張り切りだした3人、寝床の用意、コンロの用意、テントを張りビールを酒をワインを、旨い食事を、本当の目的はこれではと口が裂けても申しませんよ。一日目は其処で夜を明かした。一番上の駐車場で「3時間あげるから、どうぞ登ってきて」と嬉しい言葉に水とパンを詰め登った。もうすぐ池という処で時間切れ、石の上に座って御嶽山を満喫した。その時期もう雪が積もっていた、向こうの方に人の姿が見えた、丁度の時間に駐車場まで帰り着いたが、二人が待っていてくれた「素晴らしい時間をいただいた、二人に感謝、山に感謝」

先日乗った電車の吊広告に“フォートリエ展”のポスターを見た、そこに懐かしい絵が載っていた。大きな声で人には言えないが「フォートリエは好きだ、好きな画家だった、今さらながらフォートリエの話は最近言わなかった」初めて絵を見たのは10歳代の頃、抽象表現の絵がどんどん出てきていた。ヨーロッパのデュビュッフェ、アメリカのポロック、日本の吉原治良とたくさん名前を聞く中にフォートリエがいた「土壁のような顔の絵、ナイフや筆で絵具を塗りつけ擦りつけた絵がお気に入りだった」「古くさい抽象表現、昔の人」とポケットの奥底にしまい込んでいたが、電車の中の吊広告を見て、懐かしい人に会ったような不思議な出会い「やはりいい絵だ」「こてこて塗り重ねられた油絵の具が匂ってくる」「やはりいい」「なんで今頃でできた」と秘かに感激していた。それと一番に思う事は、オレが今やっている仕事“わたしはわたし”の絵と共通項を感じているから。オレの話で恐縮ですが“わたしはわたし”を描きだしてもう相当長い、たくさん“わたしはわたし”の絵を描いた。この絵は人の顔の絵、わたしの顔であり君の顔であり、人の顔の絵なんだ。顔を一つ、顔を二つと並べて描いている、だんだん抽象化していった、「これはオレの形象文字のようなもの、顔の形が、この形、オレの形」顔というモチーフが丸になり、縦の線になり、横の曲線になって行った。丸い顔の形、鼻の形、口の形、目の形そんなそれぞれのパーツがどんどん抽象化していった、年を経る度にますます抽象化していった、ますます単純に、縦の線、横の曲線だけが残るようになってきた、全く元の形が消えてしまった。自分なりにこのように顔の絵を描いているものだから、フォートリエも自由や死を自分の思想の根本に持っているとは思えない、彼はただあのような絵を描きたかった、描き続けただけじゃないのかと思う。フォートリエをネットで検索すると、フランス人：没後50年：アンフォルメル絵画の旗手、というようなことを知った。ドイツに占領されていたパリで自由とか死を見つめていたと偉い先生はいうけれど、作家として彼は顔の絵を抽象化して次々描いた、題名は“人質”だけれども、そんな事はどうでもよくなって、顔の絵が描きたかったのではないかと思う。下記の評論はなかなか格調高いが「ほんまはちゃうで・・・」と画家が言っていたりして・・・。

高階秀爾先生評：第二次世界大戦の末期、パリはドイツの占領下にあった。自由を奪われ、絶えず死の恐怖にさらされるという苛酷な状況のなかで、フォートリエは、独りひそかに、理不尽な暴力に対する激しい抵抗の証言を描き続けた。戦後はじめて公開されて人々に大きな衝撃を与えた「人質」シリーズがそれである。描かれているのは人間の顔、それも強い力で痛めつけられ、押しつぶされたようなおぞましい顔である。ぶ厚い絵の具を盛り上げた強烈な表現の奥から、戦争に対する激しい告発の叫びと、人間性の回復（かいふく）を願う悲痛な祈りの声が聞こえて来る。その大胆な表現は、また若い芸術家たちに大きな影響を与え、アンフォルメル運動などの戦後の抽象表現主義の先駆者としての歴史的地位をフォートリエに与えることともなった。

内藤伸彦展<下記図版左下>10歳ぐらい若い彼は高校の現役美術教師をしていると思う。ずっと絵画を描いていたが少し前から粘土の仕事をしている。濡れた粘土を置く、日が経つうちに干からびひび割れてくる“乾いた粘土板のひび割れ”その様を展覧会に出している。最初見た時に「面白い」と感激した「今までの絵画より断然いい、ずっとこれが続けたらいい」と思ってもう何年も経っている、ずっと同じように粘土の仕事をしている。「あっけらかんと、たんと、粘土のひびを楽しんでいる」こんなものが、こんなつまらないものが楽しめる内藤君にエールを送りたい。「いいじゃないですか」

川上隆史展<下記図版右下>3,4歳年下、高校の美術教師をしていた。以前にも作品を見たことがある。今回の個展で改めて彼の作品を見た、その面白さを見た。以前に見た時は緑色した丸い塊の立体だった、大きさは拳骨ぐらい、子どもの頭大ぐらい、それらが丁寧に工芸的に造られていた。今回は前回見た丸が背面、裏になり、正面は金色の曲面、平面が立体的にくねっている、こちらを向いて「アカンベー」をしているかと思ったら、風の流れ、水の流れを感じさせる、その曲面は具象であったり抽象であったり、こちら側にまったり伝わってくる、優しく面白く伝わってくる「結構時間がかかります」と作家はいうが、その苦勞を感じさせないゆったり感がある、なかなかよかった。

土に書いた言葉<吉野せいアンソロジー><山下多恵子 編・解説>

図書館で手にとってぱらぱらめくった「この人知ってるぞ」と借りて読みだした、「いい 文章だ」「うまい」婆さんの引掛かりの文が訥々と、しかも透明に流れている、地べたを這いまわってる、いやな事も情けない事もいっぱい知ってる、やられっぱなし、叩かれっぱなし、それでも空を見てる「いい 文章だ」と感激、ちと紹介します。

新盆の済んだ八月十六日、私は思いもかけず水石山の山頂を踏んだ。<中略>山頂は霧が深く、湿気を含んだ海風が視界半分を覆い流れ、空も太陽も、太平洋も下界の展望も、濃い乳白色に塗りつぶされて、悲しいかな視野はさっぱりきかない。でも高山を知らない私には不思議と思う位、まるで立ち割ったように霧のたゆとう中央から西半景は、はっきりと阿武隈の連峯が濃藍色の肌をいきいきと、黄色い薄日さえ映えて目近くに迫る。私の心はひとりではずんだ。想像していたよりは少し禿げちよろけの多いスロープの緑。だが広々と目路は楽しく雄大にはるかだ。たしかボルヒェルトの短編だったと思う。私は忘れられない一章の記憶がある。毎日三十分の運動にひき出される死刑囚人が、ある日通路の傍にみつけた一輪のたんぽぽの黄色、ああこれは生きている。自分よりずっと長く生き続けられるだろう。憎らしいほどに羨ましいけれど、何で又こんな場所をえらんでいじらしく咲いたのだ。俺の前をつながれて歩いてゆくなかまたち、どうかよろけてあの花を踏まないでくれ。必死の思いで咲いたその命を終わりまで生きさせてやれ。それのように、スロープの敷きつめた青草の毛せんの中に、たまさかに細々と咲いた撫子の田舎びたピンクの花がしおらしく揺れている。この高地の上のその色合いの可憐さをそっくりそのまま通り過ぎたい私の目の前で、観光の娘たちが奪い合うように争ってむしりとるのを、私はいたましい思いで唯眺めた。今はひばりの季節ではない。さてその巢は、そしてその糞は！たたずむ山嶺にしめっぽい霧だけが流れている。放牧された何十頭の馬が悠々と群れていた。空を区切る稜線の向こう側にもこちら側にも群れているらしい。黒毛や栗毛の多い中に一頭だけ気品高く白馬が目立っている。ところどころに短い松の木が生えていて、自ずとに人間共との境界の役目をしているようだ。・・・

吉野せい：1899年（明治32年）福島県で生まれた。開墾農民で詩人の混沌と結婚。文学へのやみがたい思いに身悶えしつつ、生きるために土にまみれ、いつしか半世紀が過ぎた。70歳で夫亡き後は堰を切ったように書いた。大正・昭和初期の開拓村、粗末な小屋、不作続きの事も、貧困に耐えつつ子を育て、農耕を続けた人がたくさんいた。

なにげなくTVを見ていた「日本人は、有給休暇を取らなすぎる」「これは日本人が農耕民族だったから」「ただ日本は、外国に比べて休日は多い、休日・休暇を合わせたら同じような数字になるかも」などと見たことがあるタレント氏たちが話していた。オレが今過ごしている世界は労働や休暇という事では縁のない世界だけれど、同じサラリーマンでも大きい会社や公務員と小さい会社とでは違う、タレント氏たちのような自由業も違う、個人経営の商・工・漁も違う、就業していない人もたくさんいる、こんな事を考えだしたらその道に明るくないオレには荷が重すぎ。

農耕民族、政治の考え方という事で思っている事を一言。

日本人は農耕民族だ、日本人は農耕を特に稲作を大事にしてきた。「麻呂が日本じゃ」「天下を取った」という輩にとっても百姓が農耕をしてくれなかったら、日本は立ちゆかなかったのではないかな。「百姓は生かさず殺さず」そのような偉そうなことをいった処で、経済の基、食の基である農耕が一番大事、大事なものを蔑んだり、諷めたり、褒めちぎったり、哀願したりして、享受してきた。百姓は千年二千年と同じように土地を耕し植えて育て収穫してきた。百姓以外の人、麻呂や天下といった人、作ったり潰したりした人、人に助けられないと生きていけない人、みんな農耕の片隅でちらちら田圃を見ながら生きてきた、これが日本の歴史かなと思うようになった。この100年様子が変わってきた、物造り、外国からの輸出入、いろんな要素が入って千年二千年続いてきたものが崩れてきたというより消え去りかけている。「これは、本当は、ええこっちゃない」と言い続けている。ただ思う事は百姓以外の日本人、影のような裏のような日本人もたくさんいる“昔、百姓以外の人、麻呂やら賤民やらといわれた人たち”がたくさんいる、言い方が正しいか間違っているか知らないが、裏日本人の正しい“体”を考えないといけないね。文中<賤民>という言葉を使ったが、これが一番正しいかなと考えた。

ひと月前から「次の登山は白山、石徹白から、別山ぐらゐまで・・・」と計画していた。1週間前は予報で太陽マークが続いていたが台風発生接近とややこしくなってきた。昨山下山して今日帰って来たが、本来の計画は帰りが明日の予定だった「台風が来ている、予定を一日早めて帰ることにしよう」といことになった。今アトリエに居てこれを書いているが窓ガラスがガタガタ揺れている、台風の風が吹き出している、明日の白山辺りの天気予報は暴風雨だ。登山口までの崖沿いの細い道は何時降った大雨の影響かわからないが何か所も崩れ、大型重機が入って工事の真っ最中、そんな時にまたもやの暴風雨で崖崩れの傷口が大きくなればあの道も大きな痛手通行不能になるかもしれない、そんな中をとて車は走らせられない、今日帰って正解だった。

◎オレの仕事の都合で出発が午後にずれ込み、登山口の駐車場に着いたのは間もなく暗くなるというような時刻、此処で車中泊という事で「さあ、やるべえ」嬉々としておっさん二人、車から椅子、コンロ、食材と降ろし並べ、一人は水汲みに寝る用意に、一人は調理に飲みものの用意にと動き廻る「乾杯」といつもの宴が始まる。白菜とキノコをゆがいてポン酢で、お惣菜の揚げ物とハンバーグをつまみながらカンビール2本、500mlのペットボトルに入れた日本酒、同じく500mlのペットボトルに入れたウイスキー、同じく500mlのペットボトルに入れた赤ワイン「明日は登るからほどほどに」「まだまだ時間があるからこれじゃ足りないかも」たわいない会話が続く。石徹白(いとしろ)に来たのは2度目、以前は野伏ヶ岳(のぶせ)に登った、上はまだまだ雪が積もってアイゼンピッケルを付け上まで行った、今日の相棒のキヌさんは持ってきたスキーを履いてスーイスイと下って行った、宿は民宿に泊まった「こんなにたくさん飲んでこんなに安い」と驚くぐらいに旨い飯と旨い酒だった。

◎登り始めてすぐに大きな杉の木がある、残念ながら上半分は枯れ往年の姿を想像できないぐらいに元気はないがその太さはすごい、屋久杉を見ていないので比較の仕様が無いが、今まで見た中では最大クラスだ。少し紅葉が始まりかけている山道を上へ、急登は無く二本足でどンドン登る。若々しいブナの森を抜け周りに上の山が見えだした。少し紅葉かと思えるが山は緑に覆われている、少々黄色、ちょびっと赤、何本かの木が葉を落とし白い幹と枝だけが遠目にキリリ。3時間ぐらい登った頃から大きな木が無くなり見渡せるようになって尾根道に出た。ざわざわ風が吹く「台風の風か」と思ったが其処は風の通り道のようにしばらく行くと風もなくなった。晴れているが雲もある、箒で履いたような雲遠くが霞んでいる。大きな山が向こうに見える、別山だ、土色をした大きな塊の山だ立派な山だ。銚子ヶ峰まで登ると御岳山が見えた、霞んだ中に遠くに御嶽山、そのてっぺんはモクモクと白い煙が上がっている、思わず心の中で手を合わせた、台風が来れば暴風雨になる、此処も御嶽山も暴風雨の風と雨が吹き付ける、まだ見つからない人は気の毒だけれど、きつい風と雨が叩きつける。穏やかで温かいというより暑いぐらいの気候、陽射しがきつく風も無い、これからの予報が嘘のようだけれど、今回の台風は日本全部を包み込むような大きさだ。別山まで行きたかったが時間切れという事で引返した。銚子ヶ峰に山の名を記したテーブル状の名盤が添えつけられていた、それを見ると20ぐらいの山の名前が記されていた、「ここここは登ったぞ」と半分ぐらいの山には登っているのには驚き「オレも結構たくさん山の山に登っているのだ」と驚き。台風の影響は全くなく、穏やかな気候、暖かい空気では紅葉も進まない、そんな山をゆっくり下った。

◎神鳩ノ宮避難小屋(かんぼと)まで戻って水場に降りた、5分ぐらい急斜面を降りた、地面が湿りだし太いホースから水が流れ出ている、今は細々だがこのホースの太さから推察するに雨の時などはほとぼしり出ているのかもしれない。それからどンドン下ると広々したところ、木々も鬱蒼としている、そんな中一人でいた、パラパラ枯葉が舞い散る音、風が微かに吹く中、次から次へと枯葉が落ちてくる、音がする、乾いた音が聞こえる。そのパラリ、パラパラの音が今まで聞いたことのない調子「世の中にはこんな不思議な音もあるのか」と幻想の世界。

石徹白から白山に登る道を“美濃禅定道”と昔は言ったそうだが、平安時代・鎌倉時代には白山信仰が盛んで「上り千人、下り千人、宿に千人」といわれるほど修験者の出入りが盛んで、近代まで“神に仕える人が住む村”として有名だったようだが、厳しい高地、雪国、過疎化が高齢化が進み人口も200人台だとか。今回この村を通過して鄙びた美しさ、秋の風に感動、また訪れたい処だ。

亡くなった飯橋先生が「石器時代は一万年も続いた、その一万年の間、石器人はほとんど変わりなく暮らしていた、今の変わりようはなんだ、こんなに変わってはいかん・・・」とよくぼやいていた。オレもそう思う、衣食住の基本的なものから思考、思想、文化もどンドン変わって行っている。科学的な知識が進むというのか人間の知能が災いするというのか、生活の越し方が変わっていった、加速度がついてどンドン変わっている。

別冊太陽<縄文の力>をばらばらめくっていると、ストーンサークルが目に入った。ストーンサークルという文字を見て最初に思ったことが「呪術(しゅうじゅつ)、まじない」「墓所」「イギリスの巨石、立派なストーンサークル」「ねつ造」<これは慌てて本の発行日を見ると2013年で胸をなでおろした>話が長くなるが、<旧石器ねつ造事件2013年毎日新聞の大スクープ>神の手を持つ男と玄人からも素人からも尊敬されていた藤村さんが次々新しい発掘をし、新しい発見をし、新しい学説を打ち立てていった。彼の発掘によって、教科書までもが塗り替えられ、日本の石器時代は世界的にもものすごいものだと言われるようになった。それまでは日本には「前・中期石器時代」は無いとされていたが、彼の発掘成果によって、日本の旧石器時代の始まりはアジアでも最も古い70万年前まで遡るとされる。また、中国、韓国、北朝鮮など歴史教科書問題で対立している国々が、「日本人が歴史を歪曲しているのが証明された」と大々的に報道した。藤村の発掘はおかしいと思った毎日新聞の記者が遺跡に隠れて見ていると、彼が遺跡に物を埋めているのを見つけ詰問し捏造だと発覚した。考古学の権威たちにもそれは見抜けなかったのか、間違っていると発言する勇気が無かったのかは知らない。15年前東北を旅した時に三内丸山遺跡の傍を通って、小さい発掘現場を見せてもらった時にその現場にいた先生が「日本は大和朝廷は大事にするが、東北の石器時代の考古学はねえ・・・」と自嘲気味におっしゃった「捏造もねえ、誰も、何も、口をはさめない雰囲気だった・・・」

話は戻って、秋田県鹿角市(かずの)に日本最大のストーンサークル<大湯環状列石>がある。十和田湖の南側に在る、時代は4000年ぐらい前らしい、ひと抱かえもある大きさの石を5,6キロ離れた河原から運んでいる、たくさんの石を円形や楕円形や菱形のような形に組み配置している、そんな形が50個100個とある、中に住居跡もある。驚いたのは日時計の事、日時計組み石があるという事、日時計は夏至の日没の位置を示しているという。彼らは太陽が昇り沈む位置を観察し食べ物の旬や生活の中の“祈り”や“マツリ”に関わる縄文カレンダーにも関わっている。マツリの道具としての土偶、石刃、男根状石製品、動物形石製品、も出てくる。<ふじいたかやす>

これを読んでいると嘗て見た映像、イギリスのストーンサークルを思い出した、イギリスの石は巨大なもの、どうして運んだ、どうして建てた、というような巨石だったが、太陽が昇る沈む、石と石の関係、それが暦と関係していると言っていたのは日本のものと同じ事なのかと驚いた。旧石器時代、何千年も前の人たちが、発信交流の無い人たちが、日時計を作っていたとは驚きだ。ストーンサークルは墓地であり、マツリの場でもあったようで、これらも、日本のものとイギリスのものとは同じらしい。

以前滋賀のミホミュージアムで土偶展を見た、占いに使ったのかマツリに使ったのかいずれにしろこういうストーンサークルのような処からもたくさん出土しているらしい。石器時代の人たちが造った土偶、土器、は素晴らしい。首飾りのヒスイのような硬い宝石に穴をあける技術な大変なものらしい。石刃、鏃(やじり)はただ石を割ればいいのかと思っていたら、その割り方がなかなか熟練のいる技らしい。縄文土器、特に新潟方面を中心とした火焰型土器を初めて見た時には驚いた、こんな造形があったのかと驚き感激した。土偶はもっと気に入っている、あの造形はオレの造形スピリッツに符合する、マッチする、素朴、単純、力強い、違う処は親しみやすさ、好かれやすさ「オレも好かれる絵、親しまれる絵をかかねば・・・」

ただこれが正しいか間違っているのかはわからないが、4000年5000年前、教科書で習った、世界の四大文明地では<メソポタミア(チグリス・ユーフラテス川)・エジプト(ナイル川)・インダス・黄河>人々は字を書き、建物に住み、衣服を纏っていた、調理した料理を食い、酒も飲んでた、という違い、今の人間に近い生活と、石器時代人の生活の違いはすごいね。

前回の石器時代の続きの話で“縄文土器”“土偶”“人面”“動物”と興味のある粘土造形画像がどんどん出てくる。“石器時代”という言葉“縄文時代”という言葉、これらの使い分けはと調べた。“石器時代”という言葉はヨーロッパからの言葉で道具の材質によって区別をした。石の材料を使っていた時代を石器時代、金属の材料を使っていた時代を鉄器時代というように。それらを調べるうちに“旧石器時代”“新石器時代”“青銅時代”“鉄器時代”と細かくなった。ところがもっと調べるうちに場所や時代によって多様な生活様式がわかっていった。マンモスなどの今は絶滅した動物と共に暮らしていた氷河期の人間、西アジアでは土器を持ち農耕牧畜をする人間もいた。世界的には新石器時代が日本の縄文時代とほとんど重なっている、15000年～3000年ぐらい前までの10000年ぐらいが縄文時代と言われている。日本には旧石器時代は無かったと言われていたが、400か所を超す遺跡が発掘され、比較的新しい旧石器時代があったとわかっているらしい。縄文と言う言葉はMorse(モース)がCard Marked Potteryと呼び縄文と訳された。この“縄文”という言葉これらの“縄文土器”“土偶”の画像を見て上手く名付けたものだと感心する。物を造る“手造り”という事なら今の我々も一万年前の人たちも大きな差は無い、物を造るという事では同じかもしれない。時代や流行や環境や人の数、それらの背景によって造り手の“腕の見せ所”“デザイン”“技術”が変わっているだけという1500年前以降の物造りの職人たちに怒られそう「木を曲げる」「色を付ける」「鉄を加工する」「石を磨く」「こういった技術、たくさんの知恵が縄文人の素人細工とは違うぞ」と文句を言われそう。一万年と言っているが発掘されてきたそれらの数が何万点かは知らないがそれを一万年で割ってみると毎年大量のそれらを生産していたわけでは無い。とある“何処か”の場所で“誰か”が細工物を造りそれを見た隣の人が真似をし、その集落でその作業が十年二十年続いて終わる。それを見た隣の集落、そのまた隣の集落がしばらく真似をして十年二十年続いて終わる。当時もヒスイの生産地である新潟糸魚川から東北地方にまでヒスイを加工した装飾品首飾りが出土する“縄文土器”“土偶”も交易していた、考え方や生き方や、住宅の作り方、食べ物を得る方法、調理法、衣類の作り方やデザインなどの情報交換も想像がつく。「おまえの家は、綺麗でデカイのう」「君の服は暖かそうで格好がいい」「これはなんだ、意外と旨いじゃないか」などという会話に使う言葉や物の名称を指す単語があったはず、そのように考え思いそれを伝えたはずだと思いたい。会話で「これあげるよ、その代りそれをくれ」「教えてあげるよ、その代りこれを教えて」というように友好的に進めばいいけど、「この前は隣の奴に殴られた、今度は殴り返さねば」「あそこの集団は豊かだ、あの場所を我々のものに」「あそこの息子はたくましい、あいつを奪って奴隷として使おう」「遠くに住む連中が弓矢で攻めてきた、守らないと、こっちから攻めないと」というような事態にもなったのかな。いずれにしても千年、五千年、一万年前の事、遺物は土の中から出てくる、発見されて分析されてある程度の事がわかるが「何を考えていた」「何を話していた」というようなことは想像するしかないだろう、ならばオレ流に色々想像し創作して、原始住民の手振り身振りの会話、踊り、服装、男と女の違いと考えるだけでも楽しい、これはなかなか面白い。漫画の世界でもあったかな、オレ流に想像してみよう。

話は脱線したが縄文の話、そもそも縄文というのは、土に水を含ませて練込んで粘土を作る、今と同じ方法“ひもづくり”という方法、手で粘土を棒状に細長く伸ばしそれを一巻二巻とだんだん積み上げて頭ぐらいの大きさの器を造る、そこから腕の見せ所、それが5000年前の縄文技術。器の表面の凸凹を綺麗にならし思い通りの形を造ったから、化粧の開始、取っ手を造る、窓を開ける、縞模様を盛り上げる。粘土で形を造った次は、稲は無かっただろうから藁縄は無いとしても、似たような藁縄を造りそれを押し付け粘土の肌に縄文化粧をしていった、縄を転がし縄の模様を写しとっていった。その上から色々な形を付け、火焰のような、王冠のような、植物も動物も上手く抽象化されて粘土に付けられていった。凄いのが“火焰土器”と言われる縄文土器、解説の先生弁「極東アジアにおいて世界史の中でも先頭を切って一万五千年前頃から始まった土器製作は日本列島内では縄文土器として多様で個性的な土器に発展していった・・・」いずれにしてもこれらのデザインは日本独特のもの、外国には無いそうで、よくもこのような不思議な奇抜な卦体なデザインがでてきたと思う。もう一つ不思議なのが“遮光器土偶”土偶の目の形から名付けられている。複雑に細工された一連の土偶だが、目だけは同じで一様に、丸に一文字、これはなんだろうね。光を遮る、エスキモーのサングラスの意味だろうか、この命名は「ちと、不細工なり」かな。

芦生の森を散策した。今回も一本の木、気に入った木を見つけた、天狗の団扇を思わせる葉を広げる栃の木だ。太い、大きい、栃の木でこんなにでっかいのは見た事が無い、この辺りには栃の木が多い、いくら木の名前は知らないとはいえ、この葉、天狗の団扇は特異な形、すぐに覚えた、栃の木だ。

秋の空は嘘のように雲ひとつない青空で快晴、時間はもう昼に近い、なのに空気がもやっている、雨上りの朝のように地面から湧き上がる冷たい蒸気が空気をぼんやりさせている、そのもやっている空気を透かして陽の光が栃の木の向こう側を射す。太い幹が、何トンあるのかわからないぐらいに重そうな太い幹が、うっすら軽々と逆光のもやりの中に浮いたように存在する。栃の木の向こう側に生い茂る針葉樹の濃い緑色がますます沈む、その前にキラキラ輝く黄色い葉、黄色くなっている広い葉、天狗の団扇が、逆光の輝きを通して揺れる、翔ぶ、舞う。

先日登った白山の麓の村、石徹白でもお気に入りの木を見つけた。その時はまだ朝の陽が出始めた頃、山に囲まれた村を流れる川のためと、標高が高い所為なのか黄色くなり始めた大きな葉を、時々ひらひら落としながら、堂々と立っていた。木の名はわからないが照葉樹「ブナがいい、ブナの木が素晴らしい」と言っていたが、移り気の多い性質なのか、こんもり堂々と立っている大きな木、葉を生い茂らせてこんもりと立っている木に目移りがちになってきている「ブナは地味だなあ」「針葉樹の森は暗すぎる」と勝手な事をほざいている。もう一つ追加するなら木の幹に絡まるツタ類の事「きゃつらは寄生虫」「木の成長を邪魔する害虫」と思っていた、嫌っていたが、山に入って空を見るとツタの葉がふらふら揺れる、黒い幹にツタの緑が風に舞う様子を見るとこれはこれでいいと気に入りだした、秋になってこれらが真っ先に黄色に赤色に色づく「素晴らしい」の一語に尽きる。

今回の山行“山”と言うより“宴会”自然の中の食事会という事で計画した。昼前に出発して昼過ぎに木地山に着き手続きや用意やらをして、夕方に乾杯をしようとして計画した。「食べるもの、バーベキューセット、炭、お酒は用意するよ」「コーヒーセットを持ってきて」このように言われ、言われるままに甘えることをお願いをした。「寝袋は持っているよ」「新しく買ったよ」見せてもらおうと封筒型の暖かそうなもの「ザックに入りずらいが温かい」「今回は買わなかったのも毛布を持ってきた」前回「屋久島の三岳が最高だ」と言うのを聞いて三岳というなかなか入手しにくい焼酎の四合瓶が2本もある「ロックがいいかな」「お湯割りがいいかな」ビールは1ダースづつ24本「辛いのが好きだから」「あれは苦手だからこれにした」車の中で話が弾み木地山に到着した。間もなく紅葉真っ盛りと思われる季節、道中の澄んだ川の水、木々はまだらに色づいている、田圃はとっくの昔に稲が刈り取られている、家々の壁には薪がうず高く積まれている、だんだん家の数が減ってくる、廃屋もぼつぼつ出てくる「間もなくだ」山の麓の村、車でどンドン山に近付いて最後の村、昔は「ここしか知らないねえ」なんて人もいそうな村、峠を越えれば日本海だけれど、遠い。そんな木地山に泊まった。

木地山のバス停の横の建物が村の集会所、そこを借り一泊した。8軒だけの村、他所から来た人で「木地村が気に入った」と終の棲家に選んだ人が半分居る村だそうだ。昔は木地師の里、往年には100軒200軒の家が在ったとか、少し歩きまわると「あそこもここも」と家の跡、石組だけが残っている、そんな土地に杉が植林されてもう相当太く育っている。木地峠を越えて小浜方面に木地を卸したらしい。明治の飢饉でたくさんの餓死者が出「石を置いただけのその土饅頭がこの上にいっぱいあるよ」貧しかった日本の悲哀な話。

いつものメンバー、相：車に“相・垣・前・オレ”の4人で出発、湖西線安曇川駅で“小”さんを乗せ木地山に到着した。相さんの友人宅に挨拶「さあ始めよう」と宴の支度。バーベキュー用のコンロ、炭、着火剤。火はすぐに燃え炭がおこりだした。たくさんの牛肉が出てきた、普段は牛肉をあまり食わないオレ「久しぶりだ、いただきます」茄子・玉ねぎ・キノコ・いも・ピーマン・ねぎ、たくさんの旨いものが網の上に並んだ。食った、飲んだ、酔った、話した・・・ここは何故だかカメムシが多い。